日本建築学会九州支部研究報告
第45号　2006年３月

「ベラウ国立博物館開館50周年記念特別展示-パラオの日本建築文化-」について
-その１　展示の概要と南洋庁本庁庁舎の復元-

準会員○岩田紘明[*1]　正会員　辻原万規彦[*2]　同　今村仁美[*3]　準会員　柏木史成[*1]
準会員　古内佐知[*1]　同　山本美沙[*1]　正会員　岡本孝美[*4]

９．建築歴史・意匠-２．日本近代建築史
南洋群島，南洋庁，復元，模型，展示

１．はじめに

筆者らは，2001年以来，パラオ共和国に残る日本統治時代の建築物に関する研究を続けてきた[1), 2), 3)]。これまでの研究成果を基に，2005年９月30日から2006年３月末日までの予定で，同国ベラウ国立博物館において，日本統治時代の建築物に関する展示を行っている。本報と続く「その２」で，この展示の概要と展示の準備に伴って新たに得た知見などを報告する。

なお本報では，当時の用語や呼称をそのまま用いた。また以下では，原則として引用文などは，現代仮名遣いに改めた。

２．展示の概要[4)]

1955年に開館した，ミクロネシアで最も古いベラウ国立博物館は，開館50周年にあわせ新館をオープンさせ，記念事業を行った。この記念事業では，“Palau Through the Years”と題する展示が企画され，パラオをかつて統治したスペイン，ドイツ，日本，米国の時代の歴史に関する展示が行われている。このうち日本の時代については，ベラウ国立博物館と在パラオ日本大使館が担当する「日本統治時代の歴史・文化展」と共に，熊本県立大学辻原研究室が担当する「ベラウ国立博物館開館50周年記念特別展示-パラオの日本建築文化-」が含まれ，2005年９月30日から06年３月末日までの予定で，パラオ共和国のベラウ国立博物館の一室において展示されている(**写真１，写真２**)。なお，この展示にあたっては，国際交流基金の平成17(2005)年度海外展助成事業の援助を受けている。

写真１　展示室の様子

写真２　展示室の様子

「パラオの日本建築文化」展の内容は，現在もパラオに残っている日本統治時代の建築物に関するパネルを中心に，復元および現状模型などである(**表１**参照)。さらに，パラオ共和国の「コロールにおける日本統治時代の建築物」の位置を表した地図も併せて展示している。また，観覧者のためのパンフレットも用意した。

展示準備にあたっては，主にこれまでの研究成果を用いたが，南洋庁本庁庁舎とパラオ熱帯生物研究所の復元模型製作にあたっては，新たに資料収集を行った。また，これら以外の建築物の模型製作の際にも，様々な検討の結果，従来判明していなかった点が数多く判明した。特に，パラオ無線電信所庁舎（現パラオ国会議事堂）は大正12（1923）年の竣工であることがはっきりとした[5)]。これはパラオに残る日本統治時代の建築物のうち，現在判明している最も古いものである。

表１　展示物の詳細（数字は縮尺）

日本統治時代の名称	現在の名称	復元模型	現状模型	パネル
南洋庁本庁庁舎	（現存せず）	1/150	-	○
パラオ熱帯生物研究所	（一部基礎などのみ現存）	1/100	-	○
南洋庁パラオ支庁庁舎	パラオ最高裁判所庁舎	1/125*	1/150	○
パラオ無線電信所庁舎	パラオ国会議事堂	1/150	1/150	○
南洋庁パラオ医院本館	パラオ・コミュニティー・カレッジ事務棟	1/150	-	○
南洋庁観測所庁舎	ベラウ国立博物館旧館	1/150	1/150	○
南洋庁気象台庁舎	社会文化省芸術・文化局庁舎	-	-	○
海軍無線電信受信所庁舎	資源開発省土地測量局	1/150	-	○

*：アクリル製（それ以外は，全てバルサ製）

３．南洋庁本庁庁舎の復元

３．１　南洋庁の概要

南洋庁は，大正11（1922）年に臨時南洋群島防備隊を廃止した後，そのうちの民政部を受け継いで，委任統治領南洋群島の行政機関として新たに設置された[6)]。当初は，南洋庁長官の下に，長官官房，内務部，財務部，拓殖部が置かれた。また，パラオ，サイパン，ヤップ，トラック(現チューク)，ポナペ(現ポーンペイ)，ヤルートの６支庁も設置された。しかしその後，官制の改正は度々行われた。

Special Exhibit in Commemoration of 50th Anniversary of the Belau National Museum -Japanese Architecture in Palau-
Part 1 Outline of the Exhibition and Restoration of the Headquarters Building of the South Seas Bureau
IWATA Hiroaki, TSUJIHARA Makihiko, IMAMURA Satomi, KASHIWAGI Fumiaki, FURUUCHI Sachi, YAMAMOTO Misa and OKAMOTO Takami

南洋庁本庁の庁舎（**写真３**[7]，**写真４**[7]）は，木造[注1]２階建ての建物であるが，執務室はほとんど２階にあり，１階は倉庫などとして使用されていた[8]。当初は，南洋庁本庁の他，パラオ支庁，パラオ郵便局，高等法院，パラオ地方法院なども同居していた[注2]が，後には南洋庁本庁のみで使用するようになった。

南洋庁本庁の庁舎は，大正10（1921）年に臨時南洋群島防備隊司令部と分離してトラックからパラオに移転した民政部が使用していた庁舎とは異なる建物であった[6]。すなわち，民政部の庁舎とは別の建物を南洋庁本庁のために新たに建てたと考えられる。また，大正14（1925）年発行の写真集に本庁の庁舎の写真が掲載されている[9]。したがって，南洋庁本庁の庁舎は大正10（1921）年から大正14（1925）年までの間に建設されたと考えられる。しかしながら，委任統治期の最も初期に建てられた建物であり，資料が少なく，設計者をはじめ詳細は現在のところ不明である。

写真３　中庭と正面玄関

写真４　背面側全景

３．２　復元の手順

１）資料の収集

アジア会館アジア太平洋資料室に所蔵されている南洋群島に関する写真集をはじめとして，南洋庁本庁庁舎が写り込んでいる当時の写真を数多く収集した。また，その他の文献などに掲載されている写真もできる限り収集した。

２）基本寸法の決定

パラオ共和国コロールに残る日本統治時代の建築物を対象としたこれまでの実測調査の結果[1)～3)]から，いずれの建物も基本寸法として910mmを採用していると考えられたので，南洋庁本庁庁舎の復元にあたっても，910mmを基本寸法として採用した。

３）２階平面図の復元（図１参照）

まず，２種の航空写真[10),11)]により全体の形状や大きさを把握した。

次に，各種の写真より，庁舎外周の柱の本数と間隔を確認した。特に，庁舎正面右側を写した写真が多く入手できたので，まず正面右側の柱について確定した。次いで，正面左側についても写真の範囲内で左右の柱の本数と間隔が同じであること，航空写真より庁舎全体の形状も左右対称であるので，基本的には，庁舎全体を左右対称と考えた。また，背面については写真で確認できないところは，正面と同じ柱の並びとした。

各部屋の扉と窓の配置についても，まず，多くの写真から確認し，写真に写り込んでいない部分は左右対称もしくは表裏対称と考えて復元した。

右翼の階段の位置は写真により確認できた。左翼の階段の位置は，はっきりと写り込んでいた写真はなかったものの数枚の写真を総合して決定した。背面の４つの階段の位置についても写真から確認できた。

４）１階平面図の復元（図１参照）

１階の部屋の形状と外周の柱の並び方は，２階と同様とした。また，１階の部屋の窓と扉の配置は，正面階段脇の一部しか確認できなかったが，１階は主に倉庫などとして使用されていたことを考え，全ての部分が確認できた並びと同じと考えた。

５）立面図の復元（図１参照）

正面階段付近については，ほぼ正面から写され，歪みが少ないと考えられる**写真５**[12]などを基に寸法を決定し，復元した。また，各部屋の扉と窓の寸法やデザインは，**写真６**[9]を基に決定し，他の扉と窓も同じ寸法とデザインとした。なお，背面の４つの階段の詳細がわかる写真は入手できなかったため，推測のみにより描き込んでいる。

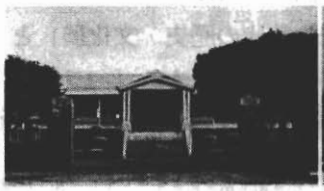

写真５　門柱と正面階段

写真６　２階廊下

６）復元模型の製作

１）から５）までで作成した復元図面（**図１**）を基に，復元模型を制作した（**写真７**）。この復元模型は，現在パラオ共和国ベラウ国立博物館で展示されている。なお，復元にあたっては，入手できた写真の数が最も多い昭和10年代の姿を復元した。

７）今後の課題

１階，２階共に，内部の部屋がどのように使用されていたのかについては，現在のところほとんどわかっていない。部屋の使い方は時代により大きく変化したと考えられるが，これらの検討は今後の課題である。

4．まとめ

本報では，これまでの研究成果を基に，現在パラオ共和国ベラウ国立博物館で開催されている日本統治時代の建築物に関する展示の概要と，展示の準備に伴って新たに得た知見や南洋庁本庁庁舎の復元方法の詳細について報告した。

謝辞

展示にあたっては，ベラウ国立博物館館長 Ms. Faustina K. Rehuher はじめスタッフの皆様，在パラオ青年海外協力隊員（当時）の山口考彦氏，在パラオ日本大使館専門調査員の三田貴氏にご協力いただいた。また，「日本無線史」については，電気通信大学歴史資料館学術調査員の田中正智先生にご教示頂いた。なお本報の一部は，平成 13ー14 年度科学研究費補助金（奨励研究（A），若手研究（B），課題番号 13750557），平成 13 年度（第 39 回）三島海雲記念財団学術奨励金，平成 16ー17 年度科学研究費補助金（若手研究（B），課題番号 16760520）によった。記して謝意を表す。

注

注 1) 当時の写真から 1 階部分の外周の柱は煉瓦造であることがわかっているが，1 階全体が煉瓦造であるとの確たる理由は，現在のところ，見つかっていない。

注 2) 大正 14（1925）年発行の写真集の門柱には，5 つの官署の門札が掲げられていた[9]。

参考文献

1) 辻原，今村，香川：パラオ・コロールにおける日本委任統治時代の建築物の残存状況と旧パラオ支庁庁舎，日本建築学会九州支部研究報告，第 42 号・3〔計画系〕，pp. 609-612，2003. 3.
2) 辻原，今村，香川：旧パラオ医院本館と旧南洋庁観測所および気象台庁舎について，日本建築学会九州支部研究報告，第 42 号・3〔計画系〕，pp. 613-616，2003. 3.
3) 辻原，今村，岡本：パラオにおける日本委任統治時代の建築物に関する 2003 年と 2004 年の調査，日本建築学会九州支部研究報告，第 44 号・3〔計画系〕，pp. 749-752，2005. 3.
4) Belau National Museum : Imuul Newsletter, Vol. 1, Iss. 1, September, 2005.
5) 電波監理委員会：日本無線史　第十二巻，電波監理委員会，pp. 278-279，1951. 6.
6) 南洋庁長官官房：南洋庁施政十年史，南洋庁長官官房，pp. 35-38，pp. 46-56，1932. 7.
7) 南洋協会南洋群島支部：日本の南洋群島，南洋協会南洋群島支部，口絵，1935. 10.
8) 能仲文夫著，小菅輝雄編：復刻版　南洋紀行　赤道を背にして，南洋群島協会，p. 57，1990. 5.
9) 南洋協会南洋群島支部編：日本帝国委任統治　南洋群島写真帖，南洋協会南洋群島支部，ページ番号なし，1925. 5.
10) Keiko Ono : Building Paradise: The Establishment of Japanese Colonial Towns in the Western Pacific, シドニー大学博士学位論文，p. 150，2002. 3.
11) 前掲書 8)，p. 57.
12) 南洋群島文化協会，南洋協会南洋群島支部編：南洋群島写真帖，南洋群島文化協会，南洋協会南洋群島支部，p. 60，1938. 10.

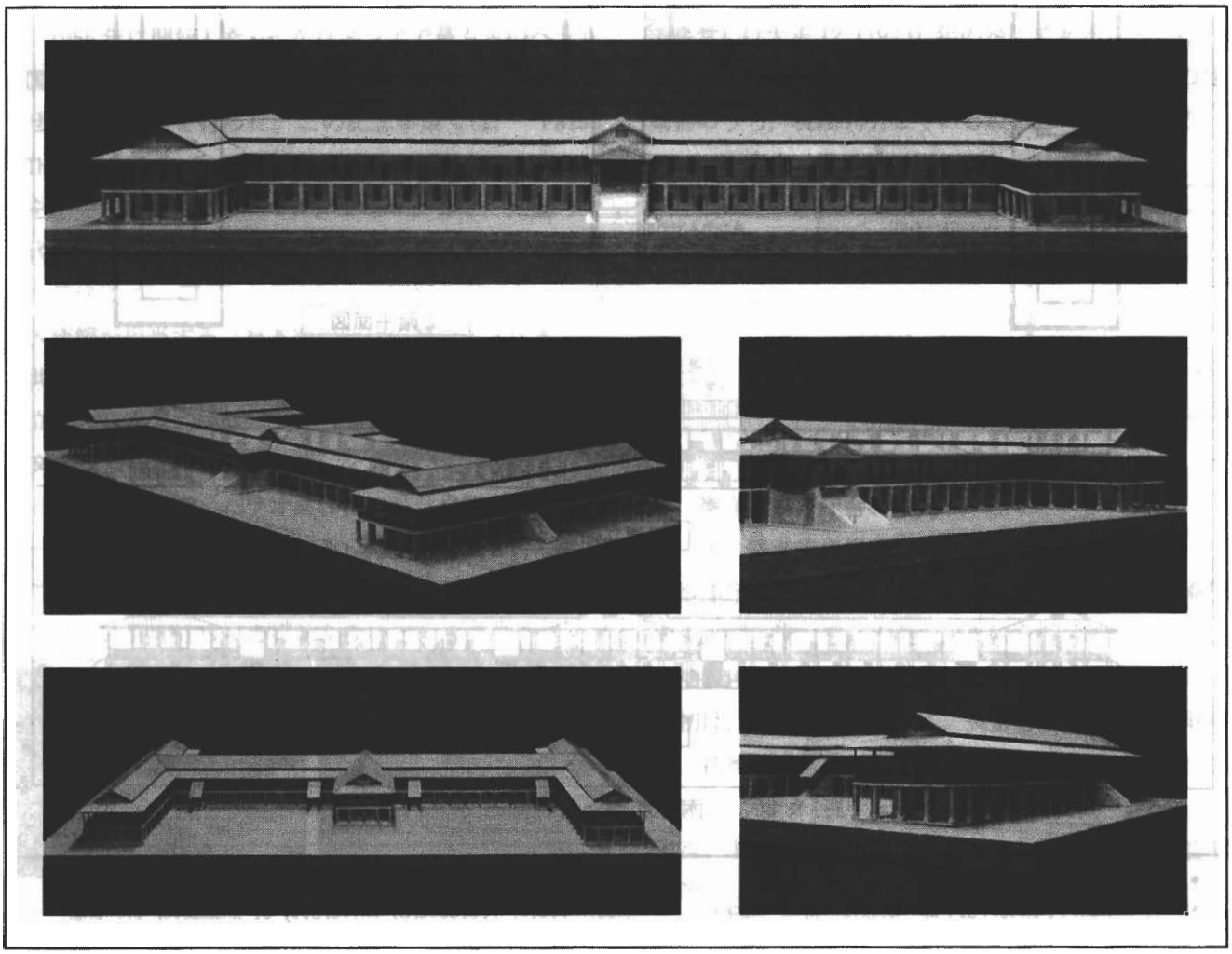

写真 7　南洋庁本庁庁舎復元模型

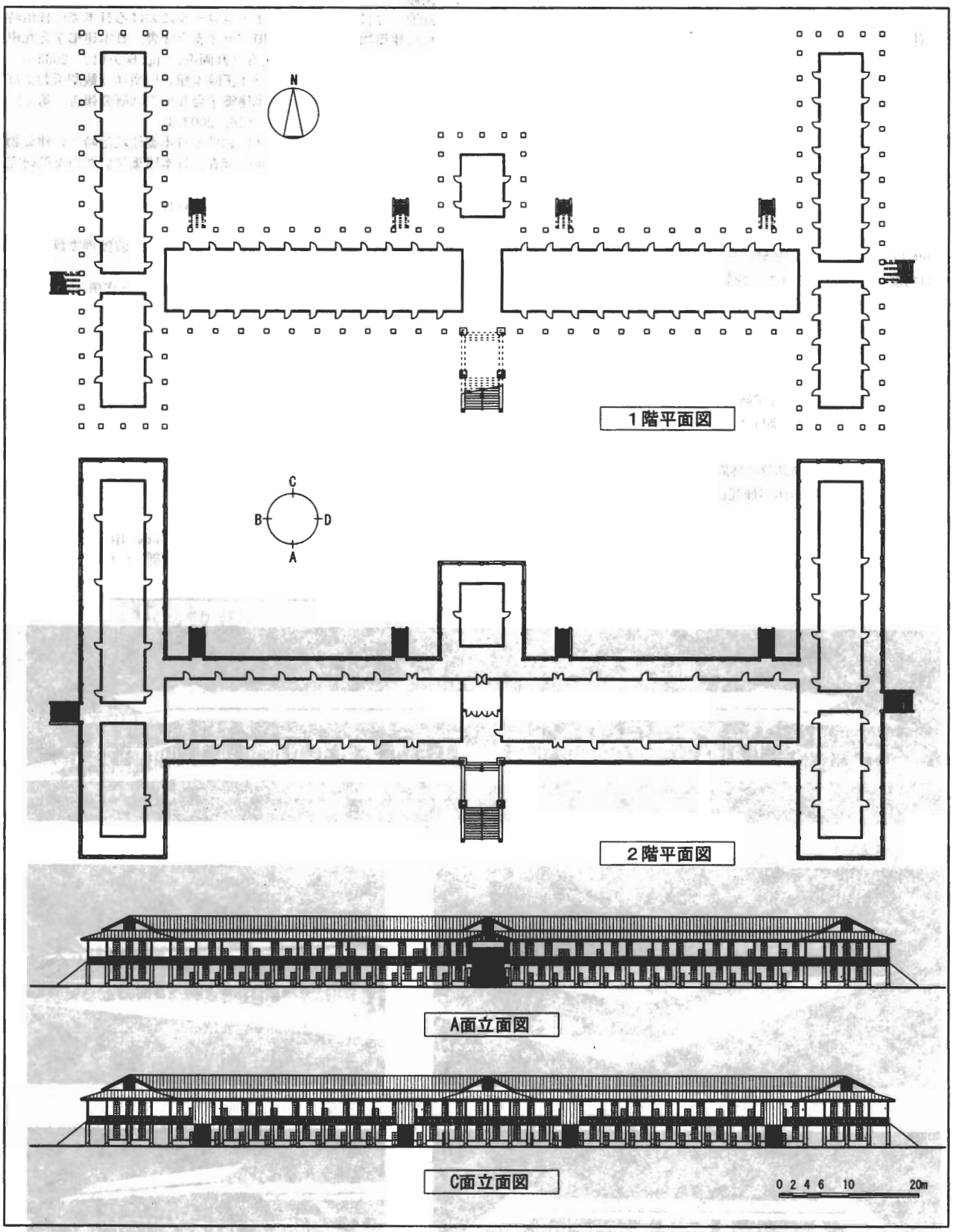

図１　南洋庁本庁庁舎復元図

*1：熊本県立大学環境共生学部　Prefectural University of Kumamoto
*2：熊本県立大学環境共生学部　助教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
*3：アトリエ　イマージュ　Atelier Image
*4：熊本県立大学環境共生学部　助手・修士（工学）　Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. Eng.